

論文

韓国の子どもの本の文化史・試論

— 韓国児童文学100年(1923年～)・韓国現代絵本35年(1988年～)
の視座から、1987～2007年を中心にふりかえる —

A Study of the Cultural History of Children's Books in Contemporary Korea

大 竹 聖 美

This report covers the 20 years from the declaration of Korea's democratisation in 1987, a turning point in the history of children's book culture, to the end of the second revolutionary government in 2007. In the early 2000s, picture books in particular began to gain international recognition, and new library concepts such as children's libraries and picture book libraries were opened. Korea's unique children's culture, based on the ideals of national independence and people's liberation, has been globalised, with a stronger aspect of socially participatory literature that strives for a democratic and just society, and youth literature that strives for social change.

キーワード：韓国児童文学／韓国絵本／オリニ／青少年文学／参与文学

1. はじめに

韓国の子どもの本の歴史は、崔南善(チェ・ナムソン／최남선)ⁱが1908年に創刊した『少年』ⁱⁱ誌を視野に入れながらも、本格的には、1923年に方定煥(パン・ジョンファン／방정환)ⁱⁱⁱが創刊した児童文芸誌『オリニ(어린이)』^{iv}を起点とする100年の歴史を刻んでいる。

日本の代表的近代児童文芸誌『赤い鳥』に比較される朝鮮初の本格的児童文芸誌『オリニ』を創刊した方定煥は韓国児童文学の開拓者であり、また韓国の国民の祝日である5月5日の子どもの日(オリニナル)を制定し子どもの人格を尊重するオリニ運動を主導した韓国の子どもの父、近代偉人の一人として尊敬されている。

方定煥は、1919年の3・1独立運動で独立宣言文を読み上げた天道教三代目教主の孫秉熙の娘婿であった。天道教が1920年6月に創刊

した雑誌『開闢』の第3号(1920年8月)には「어린이 노래(オリニ・ノレ／子どもの歌)」として、ロバート・ルイス・ステューブソン(Robert Louis Balfour Stevenson, 1850～1894年)の点燈夫(The Lamplighter)^vを朝鮮語に翻訳し、ハングルで発表している。ここで使われた<オリニ>という用語が、方定煥による造語としてのオリニ(子どもの尊称)の初出である^{vi}。そして、その翌月にはオリニの用語が初めて発表された『開闢』の東京特派員として渡日し、方定煥は約3年間の東京時代を過ごしている^{vii}。

1923年9月の関東大震災前には完全に朝鮮に戻った方定煥であるが、この1923年までの東京時代に、方定煥は世界名作童話の朝鮮語翻案集『사랑의성물(愛の贈り物)』(京城(ソウル)：開闢社、1922年7月7日)を出版し、日本

の『赤い鳥』と比較され、韓国の創作童謡・童話のゆりかごと見なされる『オリニ』誌を創刊した。このように、方定煥と1923年は、韓国児童文学の出発点を考えるうえで非常に重要である。

それから100年が経過した2023年は、オリニナル（子どもの日）100年、韓国児童文学100年として韓国各地で記念行事が大々的に行われ、現代韓国の子どもの本の文化における重要な価値観といえる＜抑圧された人権の解放＞＜子どもの自由な精神の解放＞＜想像力と多様な価値観が共生する未来志向の子どもの本＞がアピールされた^{vi}。

2. 韓国現代絵本の35年

同じく2023年は、絵本の分野でも節目の年であった。現代韓国創作絵本の嚆矢とされるリュウ・チェスウ(류재수)『山になった巨人 白頭山ものがたり(백두산 이야기)』(日本語版は1990年、福音館書店刊行)が出版された1988年から、35年を迎えたからである。

『山になった巨人』が出版された1988年における韓国の社会状況は、その前年(1987年)に大規模な民主化闘争を経てようやく民主化宣言がなされたばかりで、言論や表現においてまだまだ重く暗い時代背景があった。大韓航空機爆破事件が起きたのも同年11月のことである。



リュウ・チェスウ『山になった巨人』イ・サンクム/まっただし共訳、福音館書店、1990年

しかし、1988年1月には、1945年から長く続き、1982年に全面解除されながらも一部地域で続いていた夜間通行禁止令が完全に解かれ、同年9月にはソウルオリンピックも開催され、文化国家として国際的な表舞台に立った。つまり、韓国現代絵本の歴史は、民主化宣言と初のオリンピック開催という現代韓国史における非常に重要なターニングポイントと共に拓かれたのである^{ix}。

その後、2023年までの35年間の韓国絵本の到達点は、2022年に絵本作家スージー・リー(Suzy Lee)が国際アンデルセン賞を受賞したことです。すでに世界から認められたところでもあり、韓国の絵本35年、韓国の子どもの本100年が祝われた2023年というのは、＜韓国の子どもの本の世界化＞がますます自信を持って打ち出された節目だったといえる。



スージー・リー『なみ』講談社、2009年

3. 2000年以降、世界に注目され始めた韓国の絵本

ところで、日本における韓国の子どもの本の受容はどのような過程があっただろうか。絵本に関しては、筆者は、2000年に開館した日本・上野の国際子ども図書館の開館記念イベント「オリニの世界から—韓国絵本原画展」をターニングポイントとして指摘したい^x。

この原画展は、韓国にて1988年に刊行された『山になった巨人』を始めとする90年代の韓国の子どもの本の成果が海外で初めて公開された画期的なものであった。この原画展をきっかけに日本の出版社で絵本を手掛ける編集者たち

が初めて隣国の作品を目にし、『ソリちゃんのチュソク』（2000年、セーラー出版）、『こいぬのうんち』（2002年、平凡社）、など現在も韓国の子どもの本の代表作として読み継がれる作品が翻訳出版されることになったといっても過言ではない。韓国では1984年に発表された国民的作品である権正生『モンシル姉さん』（2000年、てらいんく）が日本で翻訳出版されたのも国際子ども図書館が開館した2000年である。

韓国の子どもの本は、2000年の日本での原画展を機に世界に出始め、2002年（リュウ・チェスウ『きいろいかさ』メディアリンクスジャパン）、2003年（イ・ホベク『うさぎのおるすばん』平凡社）と2年連続でニューヨークタイムズ最優秀絵本賞を受賞。2004年にはボローニャ国際児童図書展にてラガッツィ賞に入賞（ユン・ミスク『あずきがゆばあさんとトラ』アートン）するなど、新たな時代を迎えることになった。

こうして、2000年以降、韓国の絵本作品は日本をはじめ、フランス・アメリカなどに版權輸出されるようになり、それによってさらに意欲的で新しい絵本専門出版社が次々と立ち上がり、若手新人作家が続々とデビューしながら多様性を拡大していった。

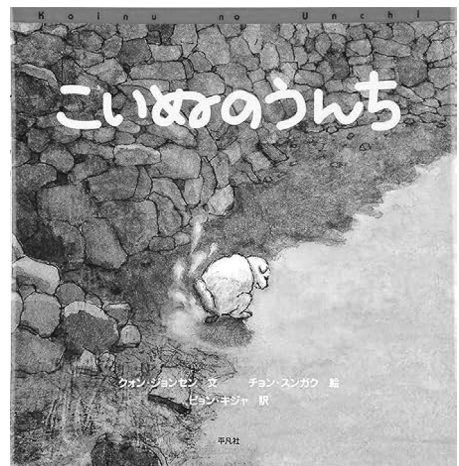
そして、2020年に絵本作家ペク・ヒナ（백희나）がアストリッド・リンドグレン記念文学賞を受賞し、2022年にスージー・リーが国際アンデルセン賞を受賞、さらに2024年は、児童書の作家ではないが韓江（ハン・ガン／한강）がノーベル文学賞を受賞するなど、韓国の出版文化が世界的に注目されるに至っている。

4. 1990年創立、韓国初の子どもの本専門書店とともに動き出した現代韓国の子どもの本の出版文化

2000年に東京と宮城で開催された韓国絵本原画展で出展された作品は、1988年のリュウ・チェスウ『山になった巨人』（日本語版：福音館書店、1990）とカン・ウヒョン『さばくのきよ



イ・オクベ『ソリちゃんのチュソク』みせけい訳、セーラー出版、2000年



クワン・ジョンセン文、チョン・スングク絵『こいぬのうんち』ビョン・キジャ訳、平凡社、2002年



権正生『モンシル姉さん』卞記子訳、朴民宜絵、てらいんく、2000年

うりゅう』(日本語版:講談社、1988)^{xi}のほかは、すべて90年代の作品である。

韓国におけるこのような創作絵本の出版は、リュウ・チェスウの1988年の『山になった巨人』が先駆けであったものの、本格的には、当時まだ珍しかった国内作家による創作絵本の単行本出版を試みる子どもの本の専門出版社としてキルボッオリニ(길벗어린이)社^{xii}が1995年に創立し、その記念としてクォン・ユンドク『マンヒの家』(日本語版:セーラー出版、1998)、イ・オクベ『ソリちゃんのチュソク』(日本語版:セーラー出版、2000)、チョン・ユジョン『おいしいよ!はじめてつくるかんこくりょうり』(日本語版:福音館書店、2013)が出版されたところから軌道に乗り始めたと言ってよい。

海外ですでによく売れている書籍を安易に韓国語で出版するのではなく、国内の作家を育成し、韓国の子どもたちの望ましい成長のために、自分たちの子どもが主人公で、自分たちの生活・文化・歴史に根差した固有の物語を創作する努力をする出版社は、当時<良心>的出版社と呼ばれ、安易な商業出版とは区別された。

1995年に創立したキルボッオリニ社から同年刊行された『マンヒの家』、『ソリちゃんのチュソク』、『おいしいよ!はじめてつくるかんこくりょうり』は、80年代の民主化運動に参加した<進歩>的な人々、特に子どもの本の

読書運動や教育に関わる人々に支持され、推薦図書として広く普及していった。1995年はKBBY・韓国国際児童青少年図書評議会の創立年でもある^{xiii}。

1988年にリュウ・チェスウ『山になった巨人』で現代韓国創作絵本の扉が開き、1995年にIBBY・国際児童図書評議会の国家会員となしながら韓国支部・KBBYが発足し、韓国の子どもの本の出版文化はいよいよ世界水準で動き始めることになる。以下、時系列で整理したい。

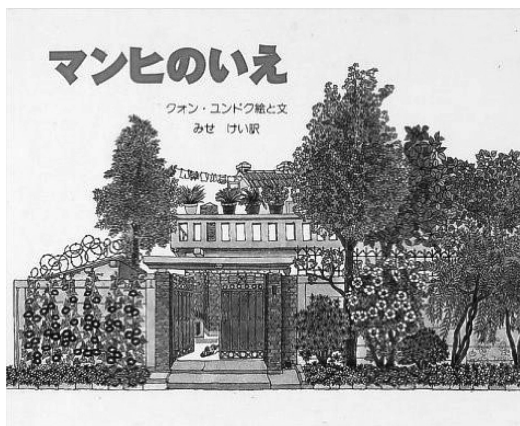
① 1990年、韓国初の子どもの本専門書店がオープン

筆者は、現在のような世界から注目される韓国の子どもの本の出版文化の隆盛は、1990年にオープンした韓国初の子どもの本の専門書店「チョパン(초판)」^{xiv}が、その初期の段階で大きな役割を果たしたと考える。

ソウルの新村(シンチョン)という延世大学・梨花女子大学・西江大学など有名大学が集まる学生街の、梨花女子大学のすぐ裏手(梨大後門)で開店した「チョパン」は、1990年代の韓国において海外の名作絵本に自由に出会うことができる唯一の場所と言ってよかったので、子育て中の母親たちのほか文化的欲求の高い若者や新しい文芸・アートを楽しむ幅広い層の人々が集い、その存在が注目された。

1990年の韓国というのは、前年1989年に海外渡航の自由化がようやく実現されたばかりという社会状況にあったため、世界の良質な子どもの本に触れられる韓国初の専門書店「チョパン」は、当時まだまだ珍しかった未知なる海外の作品を通して新しい空気を吸うことができる画期的な存在だった。海外の自由で多様な子どもの本の世界を垣間見られる開かれた窓の役割を果たした。

さらにチョパンは、海外の絵本を紹介し販売し普及させただけでなく、国内作家や編集者を育成するワークショップを開き、韓国独自の創作絵本の出版を後押しするための原画展を開催



クワン・ユンドク『マンヒのいえ』みせけい訳、セーラー出版、1998年

するなど様々な新しい試みも行った。現在、世界的に注目される韓国の絵本文化における多様な試み、つまりbookカフェ、子どもの本が充実した民間の図書館、絵本美術館などのハード面のほか、それらの場所で行われる作家との出会いやワークショップ、原画展、独立系出版やオリジナルグッズなどのソフト面も含め、それらの先駆け、実験場のような場所でもあった。

実際に、創設者の申京淑（シン・ギョンスク／신경숙）が企画し、アートディレクションした『ソリちゃんのチュソク』『マンヒの家』『はじめてつくるかんこくりょうり』は、チョパンでの原画展をきっかけに1995年設立のキルボッオリニ社から出版された。キルボッオリニ社は、これらの絵本の出版をもって、90年代における子どもの本専門出版社としての確固たる地位を確立した。

② 1991年～1995年、子どもの本専門出版社が次々と設立

90年代は、現在では老舗というべき韓国を代表する子どもの本専門の出版社が次々と立ち上がった。このことも、90年代に現代の韓国の子どもの本の文化の基盤が整ったといえる根拠の一つである。

1991年創立の＜ポリ（보리）＞^{xv}、1994年創立の＜ピリョンソ（비룡소）＞^{xvi}、＜チェミマジュ（재미마주）＞^{xvii}、1995年創立の＜キルボッオリニ＞をその代表として挙げたい。これらの子どもの本専門出版社が90年代初頭に次々と出現しながら、国内作家のオリジナルな創作作品の出版に向けた新しい努力が始められた。

これらの努力の成果が、2000年に日本で行われた「オリニの世界から 韓国絵本原画展」であった。この原画展に出展された作品ならびに90年代～2000年代初頭に日本で出版された韓国の絵本の過半数は、これら90年代前半に創業した子どもの本専門出版社から生み出された作品群である。

③ 1995年、KBBY発足

筆者は、1995年を、韓国の現代絵本のターニングポイントとして注目している。1994年までの韓国では、上述の通り1990年に韓国初の子どもの本専門書店がオープンし、子どもの本の専門出版社が90年代前半に次々と創業していながらも、実際には海外絵本の翻訳出版や全集物のセット販売が中心で、韓国国内の作家によるオリジナルな単行本創作作品出版には至っていなかったからである。

そんな中で、1995年にキルボッオリニ社が創立され、『ソリちゃんのチュソク』や『マンヒのいえ』など、現在も読み継がれるロングセラーの韓国オリジナル作品が世に出された。この二作は、日本でも翻訳され、隣国の文化に初めて出会う絵本として注目された。『ソリちゃんのチュソク』は、2001年の全国学校図書館協議会「青少年読書感想文全国コンクール」課題図書に選定されている。韓国の翻訳作品が選定されたのは戦後初のことであり、日本における韓国絵本の受容史に特筆すべき古典的作品として位置付けたい。

こうした作品をもって95年から子どもの本の出版活動を始めたキルボッオリニ社は、その後も近代文学作品や民画などの伝統絵画を現代絵本として再創造し、韓国独自の文化を探究していった。

90年代前半までは世界名作文学全集や海外作品をそのまま翻案・翻訳した消費的な出版が主流だった韓国の子どもの本の出版文化史をふりかえると、まさにターニングポイントといえる画期的な出版が1995年に出現したのだといえる。

さらに、1995年は、KBBYがIBBYの65番目の国家会員（韓国支部）として発足した年でもある。このことも韓国の子どもの本の出版に大きな意味を持ったと指摘したい^{xviii}。

KBBY発足に尽力したのは、前述の通り1990年に韓国初の児童書専門書店＜チョパン＞を創立したシン・ギョンスクである。彼女が事

務局長として実務を動かしながら、初代会長として韓国固有の精神文化を研究する教育哲学者であり、韓国の博物館教育学でも著名な金仁會(キム・イネ/김인회) 延世大学教育学部教授を迎えた^{xx}。延世大学博物館では1996年3月に韓国初のIBBYオナーリスト(IBBY Honour List1994) 巡回展示を開催している。これは、第一回KBBY子どもの本展示会でもあり、そのタイトルは、「世界の絵本わたしたちの絵本展」だった^{xx}。

さらに、後述する<オリニ図書研究会>という韓国における子どもの読書文化運動の市民団体として特筆すべき影響力を持った団体が「子どもの本の推奨目録」を初めて発行したのも1995年であった。これらをもって、筆者は1995年を現代韓国絵本が本格的に動き始めた年と見なしている。

④ 1996年、ベルヌ条約加盟

1995年にKBBYが発足したことも一つのきっかけになったのだろうか。1996年、韓国は世界的な著作権条約であるベルヌ条約に初めて批准した。1886年に成立したこの条約に関しては、日本の場合、遡るところ100年ほど前の近代(1899(明治32)年)において加盟を済ませているのであるが、韓国においてはようやく1996年に批准したのである。これも韓国の絵本が世界で認められていく重要な前提条件になったはずだし、韓国の出版文化全体にとって歴史的な転換点だったはずである。児童書出版社の新旧交代が決定的になったのではないだろうか。

80年代までの韓国では、児童書と言えば訪問販売によるセット売りの全集が中心で、少年少女文学全集やディズニー絵本、漫画、雑誌、学習書などが独自の販売ルートで売られる商業主義的で大衆的、消費的なものだった。文芸的な出版物の多くは、同人誌や自費出版に該当するものが大多数だったと言ってよい。

しかし、1996年以降は、海外から正式に版權

を購入し、海外ですでに評価の定まっている著名な作品を翻訳出版する時代に移行していったことになる。そして、1995年に創業したキルボッオリニ社のような意欲的な出版社は、海外作品の輸入に甘んじず、国内の創作絵本作家の育成と、さらには海外にむけて韓国のオリジナルな出版物を輸出していくことを目指して精力的な出版活動を展開していった。韓国の新しい子どもの本の文化はこのようにして90年代半ばに準備されたのである。

⑤ 90年代韓国の子どもの本の文化(オリニ文化)の特徴

1990年代に勃興した韓国の子どもの本の文化は、子どもの本の専門書店や子どもの本の専門出版社の創業と同時にデビューした国内作家たちの意欲的な取り組みによって今日の世界的な評価の獲得に至っている。

しかし、この韓国の子どもの本の文化の成長を振り返ると、出版社や作家の意欲的な創作活動の背景には、それを支えながら連帯する教員・司書・ストーリーテラー・読み聞かせ活動家・評論家などの子どもの読書運動にかかわる人々がたいへん熱心に活動を展開していることに気付かされる。その代表的な団体が、1980年創立の<オリニ図書研究会>^{xxi}である。

<オリニ図書研究会>は、<童話を読む大人>という集まりを催し、民主主義と自由な子どもの本の研究に情熱を注いだ。そして、良書を推薦する「図書目録」を作成し、町の書店や地域の図書館、児童館などで無料配布しながら、韓国の子どもたちの読書文化に大きな影響を与えた。この<オリニ図書研究会>の活動は、韓国の民主化運動の流れと重なる市民運動の熱気を帯びており、韓国における子どもの本の文化の性質を理解するうえで無視することはできない。

1995年に初めて発行されたオリニ図書研究会の推薦図書目録では、初の文民政権(軍人ではない大統領)^{xxii}が1993年に誕生したばかりの

韓国において、自由で民主的な社会の実現を求めて子どもの読書文化の新たな指標が示された。

1995年の韓国の子どもの本の文化の勃興の背景にある韓国の現代史を簡潔に振り返ると、民主化宣言が1987年、オリンピック（ソウル五輪）開催と夜間通行禁止令の全面解除が1988年、海外渡航の自由化が1989年、国連加盟が1991年、文民政権の誕生が1993年と、ほんの5～6年の間に民主主義や行動の自由の面で劇的な変化があったことが分かる。

そうした社会背景をふまえて、1988年出版の『山になった巨人』（日本版：福音館書店、1990年）のページを改めてめくると、民族的で神話的な物語からは、実際の朝鮮半島における周辺民族との葛藤の歴史、特に現代韓国でいわれるところの＜日帝強占期＞（1910～1945）における抗日運動や、その後の朝鮮戦争と南北分断、さらに80年代末まで続いた軍事独裁政権に抑圧されてきた民衆の忍耐力をも読み取ることができるのである。

そして、そうした過酷な現実にあっても決して希望を失わず、何度も立ち上がってきた朝鮮半島の人々の不屈の精神と強靱な愛国心が描かれている。『山になった巨人』には、侵略と抑圧への抵抗が表現されるにとどまらず、その先の分断の現実の克服と、過酷な歴史のトラウマからの解放、つまり平和を希求する祈りまでもが感じられるのである。和解と共生を目指す＜統一志向の民衆文学＞のダイナミズムである。この点で、筆者は『山になった巨人』こそ韓国現代絵本の嚆矢であり、韓国児童文学100年の視座から見て、その特質を最もよく表現した代表的絵本作品として評価したい。

⑥ 2000年代、新しい図書館の設立——「順天（スンチョン）奇跡の図書館」（2003）、「国立オリニ青少年図書館」（2006）の開館

さて、90年代の国内作家と子どもの本専門出版社による韓国独自の創作絵本や児童書出版に

向けた努力は、自由で民主的な子どもと大人の読書文化を育成する力強い市民運動と相乗効果を発揮し、2000年代に入るや、子どもの読書を中心に据えた新しい民間図書館ならびに国立の子ども図書館の設立へと展開していった。

これまで家庭内における個人的な営みだった読書（そのほとんどが、親から買い与えられた世界名作全集や偉人伝、伝来童話集などのシリーズものだった）が、2000年代の新しい図書館の登場によって大きく変化した。

新しい図書館では、子どもたちが自由に選んだ好きな本を、寝転がったり、隠れたりしながら読める場所が設計されているなど、90年代までの勉強する場としての図書館から様変わりした。ボランティアによる読み聞かせあり、児童文学や絵本の作品世界を体験するワークショップや作家との対話の場があり、つまり、2000年代韓国に出現した新しい図書館は、市民たちの交流の場であり、ボランティアによる連帯の場、そして、より良い社会を考える思索と研究ができる広場であった。

この新しい文化空間としての民間図書館の代表は「奇跡の図書館」と呼ばれ、市民による募金とボランティアによって運営されている。最初の奇跡の図書館は、2003年に全羅南道・順天市に開館した「順天奇跡の図書館」^{xviii}で、2024年11月現在、こうした「奇跡の図書館」は全国18か所で運営されている。

また、韓国初の国立の子ども図書館が2006年に開館した。国立オリニ青少年図書館^{xix}である。ベルヌ条約の批准に関しては日本より約100年、IBBY・国際児童図書評議会の入会に関しては日本より約20年遅かった韓国であるが、国立の子ども図書館の開館に関しては東京・上野の国立国会図書館国際子ども図書館^{xxv}が開館された6年後には早くも開館されたことになる。

さらに、韓国の国立子ども図書館は、国立オリニ青少年図書館（傍点筆者）という名称となっており、子ども（オリニ）だけではなく

＜青少年＞が明示されている点で注目させられる。この点に関しては、2006年という開館時期とあわせて考えると、やはりその名称を通して青少年の読書を一般文学や成人の読書とは区別して強調している、と指摘したい。従来から韓国では、オリニ文学・オリニ文化・オリニ公園・オリニ博物館など、成人とは区別したオリニ（子ども）のための教育・福祉関連の文化財・施設は存在していたが、2000年代に入り、加えて＜青少年＞がオリニ（子ども）や成人とは区別してジャンル化され、独特の意識とテーマを持って探究され始めた。

⑦ 2007年、青少年文学の台頭——「チャンビ青少年文学賞」、「韓国児童青少年文学学会」創設

2006年の国立オリニ青少年図書館の開館に続き、2007年には新しく青少年文学賞が創設された。これまでは、いわゆる児童文学賞はあっても、青少年文学として従来の児童文学や童話・童謡・童詩とは区別した文学賞というものは存在しなかったもので、この点で2006年、2007年というのは、やはり韓国の子どもの本のターニングポイントといえるだろう。

青少年文学を新時代の文学賞として創設したのは、1970年代から良質の児童文学叢書を出版し続けてきた、韓国を代表する出版社と評価される＜チャンビ（창비）＞^{xxvi}である。2007年にチャンビ青少年文学賞^{xxvii}を新設した。さらに、2007年には韓国児童青少年文学学会^{xxviii}も発足しており、いずれも＜青少年＞に焦点が当てられている点で、筆者は2006年、2007年を韓国児童文学100年の歴史の中で、＜青少年＞が重要なキーワードとなった転換点と見なしたい。

韓国では1960年代から、近代の重要な児童文学者の筆名を冠し顕彰した児童文学賞を制定しながら、国内の児童文学者たちを激励し、韓国児童文学を開拓してきた。

小泉（ソチョン）文学賞（1965年～）、世宗（セジョン）児童文学賞（1968年～）、尹石重

（ユン・ソクチュン）文学賞（セサック文学賞の名称で1973年～、2005年～尹石重文学賞の名称に）、李周洪（イ・ジュホン）児童文学賞（1981年～）などが1990年代以前の主たる児童文学賞である^{xxix}。

そうした従来からの韓国児童文学界の土壌に新しい風を吹き込んだのが、2007年のチャンビ青少年文学賞である。この文学賞は新人作家の登竜門でもあり、21世紀の韓国社会に必要とされる新しい文学を公募する試みであった。第1回受賞作はキム・リョリョン『ワンドゥギ』で、本作品は2011年に韓国で映画化され、2016年に日本でも翻訳出版された^{xxx}。

2000年代の現代韓国を生きる男子高校生ワンドゥギの日常を通して、障がいや貧困、多文化家族の生きづらさや格差社会の中で成長する主人公の思春期を描いている。このような現代社会の実相を描き、そうした現実の中でどう自分の未来を切り拓き、社会を変革しながら同時代の多様な人々と共に生きていくべきなのかを考えさせる本作は、まさに今を生き、今を悩む青少年に向けて書かれた、現実社会の不条理や矛盾が描かれた＜青少年文学＞の象徴だった。

チャンビ青少年文学賞受賞作としては、この



キム・リョリョン『ワンドゥギ』白香夏訳、コリーヌファクトリー、2016年

後、ソン・ウォンピョ『アーモンド』（第10回受賞、2016年）^{xxxi}、イ・ヒヨン『ペイント』（第12回受賞、2018年）^{xxxii}など、日本でも翻訳出版された作品が続いている。特に『アーモンド』は、近年日本の一般書店でも大きく取り上げられ人気を集めている＜K文学＞と呼ばれる現代韓国小説として、韓国でジャンル分けされた＜青少年文学＞の枠を超えて幅広く一般小説として受容されているといえよう。

このように、近代以降、童話・童謡・児童劇などを含んだ韓国児童文学の作品世界とは明確に区別された、10代後半の中高生を主な読者対象として小説の技法で書かれた長編小説は、思春期独特の人間関係や進路の悩み、社会的ストレスや心の葛藤を描きながら2000年以降の韓国で急成長した。

日本のヤングアダルトに該当するジャンルであるこの＜青少年文学＞というジャンルが『ワンドゥギ』の第1回チャンピ青少年文学賞受賞を通して2007年に大きく印象付けられたのであるが、同年、既存の韓国児童文学学会とは別に、＜青少年＞という文字をあえて加えた韓国児童青少年文学学会（傍点筆者）が新しく設立されたということは、評論や研究の領域におい

ても、この時代に青少年文学に大きな関心が向けられていたことを示しているといえよう。

当代を代表する児童文学評論家であり、仁荷大学教授として現代韓国における学術的な児童文学研究と評論を牽引する元鍾讃（ウォン・ジョンチャン）^{xxxiii}が初代会長に就任したことも象徴的だった。

2007年は同じく児童書専門出版社として1994年創立の＜ピリョンソ＞も青少年文学賞としてブルーフィクション賞^{xxxiv}を制定しており、続く2008年には1993年創立の＜文学トンネ＞が、文学トンネ青少年文学賞^{xxxv}を設立している。

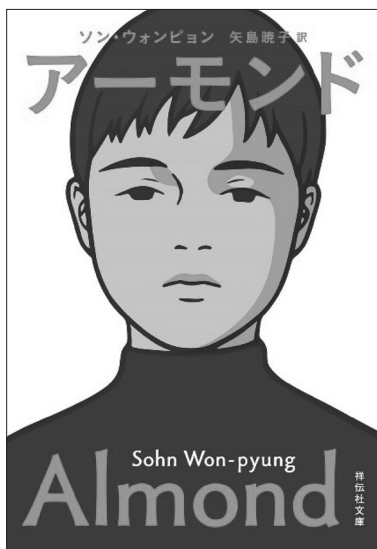
この時代は盧武鉉政権^{xxxvi}の時代であるが、1998年に就任した金大中大統領と盧武鉉大統領の就任期間の10年間（1998～2008年）は、70年代80年代の独裁政権に対して民主化を訴えながらも長らく排除・抑圧されてきた革新側の人間が政権を握った時代だったのであるから、こうした政治的背景を知ることが、韓国のこどもの本の文化史を理解するうえで非常に重要である。

民主化運動を闘ってきた人々が支持した金大中大統領と盧武鉉大統領の就任期間の10年間（1998～2008年）において、青少年文学や社会参与文学が堂々と表舞台に立ち、メインストリームで脚光を浴びるようになったのである。そして、その結果、2006年に国立オリニ青少年図書館が開館し、2007年に新しい青少年文学賞が創設され、新しい児童文学の研究と批評の場として韓国オリニ青少年文学学会が創設されたのだと筆者は理解している。

⑧ 社会参与文学としての韓国青少年文学

ところで、2007年にチャンピ青少年文学賞を新設した＜チャンピ＞とは、白榮晳（ベク・ナクチョン）^{xxxvii}が1966年に創刊した政治・文芸評論誌『創作と批評』の刊行をもって言論出版活動を開始した韓国を代表する出版社である。

1970年代、80年代の軍事独裁政権下におい



ソン・ウォンピョ『アーモンド』矢島暁子訳、祥伝社、2019年

て民主主義と社会変革を訴える民衆・民族文学、社会参与文学を主導した。韓国の代表的な所謂「進歩」系の総合雑誌『創作と批評』を社名とする「創作と批評社」(会社設立1974年)は、その愛称(略称)の「創批(チャン・ピ)」を、2003年に正式社名としてハングル表記の「チャンピ(창비)」としたのである。

70年代80年代の軍事独裁政権時代から言論で民主主義と社会変革を訴えてきた韓国の代表的出版社である「創作と批評社」は、児童文学、児童書出版の領域でも、1977年に「チャンピ児童文庫」シリーズの刊行を始め、信頼のおける児童文学叢書として現在まで韓国児童文学、児童図書出版を支えてきた。

そのような「チャンピ」が従来の児童文学賞とは一線を画す青少年文学賞を設立し、新しい作品を出版したことは、やはり韓国の子どもの本の世界に大きなインパクトを与え、その後の青少年文学や韓国の新しい小説出版の基礎をつくったと言える。

こうした韓国児童文学における青少年文学、あるいはティーンエイジャー向けの長編小説の台頭は、90年代末から世界的に大流行したハリ・ポッターブームが韓国の読書界に大きな影響を与えたこともその一因となっていると筆者は分析している。

90年代までの韓国では、誰もが認める国内の児童文学作家による長編ファンタジー作品が存在しなかっただけでなく、特に中高生にとって読み応えのある所謂長編小説は見当たらなかったのだが、2000年代に入り、ハリ・ポッターに続き「ロード・オブ・ザ・リング」(2001年)、「ナルニア国物語」(2005年)などの映画が次々と公開され、韓国においても大ヒットした。こうした世界的な長編ファンタジーブームも、韓国における2000年代半ば以降の青少年向け長編小説の隆盛に影響を与えているのではない。

しかしながら、そうした異世界や魔法が印象的な壮大なファンタジー作品が韓国の読書界に

影響を与えたにしても、その後の韓国において創作された青少年文学は、所謂ファンタジーではなく、社会参与文学であった。つまり、社会問題を変革する主体である児童青少年が、葛藤し成長するリアリズム作品が主であり、『ワンドゥギ』や『アーモンド』『ペイント』のような作品が新たに生み出され、評価されてきたのである。

5. おわりに

2023年は、韓国の子どもの本の文化に関わる専門家たち間で「韓国児童文学100年」、
「韓国現代絵本35年」が言われ、同年1月には韓国児童青少年文学学会による「オリニナル100周年記念国際学術大会」^{xxxviii}が開催され、さらに同年11月には淑明女子大学世界青少年文学研究センターと方定研究所の共同主催による「1923・オリニ解放宣言100周年記念・方定煥世界学術大会」^{xxxix}という大きな国際学術大会が開催された。

そのような2023年の「韓国児童文学100年」「韓国現代絵本35年」の視座から、本稿では、韓国の子どもの本の文化の大きな転換期だった1987年の民主化宣言から盧武鉉政権が終焉する2007年までの20年間を整理した。この20年間の特徴を一言で言うと、民族の独立と民衆の解放を理念とする韓国独自の子どもの文化の世界化、民主的で公正な社会実現を志す社会参与・社会変革の青少年文学の台頭である。

そして、その後の2010年代以降の10年間においても、韓国社会はさらに大きな変貌を遂げている。図書館でいえば、2012年に旧ソウル市庁舎(1945年までは京城府庁(1926年竣工))を改装した公共図書館「ソウル図書館」^{xl}がソウルのど真ん中の一等地において無料で市民らびに世界から訪韓するすべての人々に向けて開かれた。

また、「奇跡の図書館」の第一号が2003年に開館した全羅南道・順天市には、これまた韓国初の絵本図書館として順天市立絵本図書館^{xli}が

2014年に開館した。2018年にはソウル市草端区立絵本図書館が開館^{xiii}。2024年には江原特別自治道・原州市にも市立絵本図書館^{xiii}が開館しており、韓国の絵本文化の発展ぶりは目を見張るものがある。

他にも、ソウル・江南の商業施設内にはピョルマダン（星の庭）図書館^{xiv}が2017年にオープンし、フォトジェニックな空間が世界的に注目され、多くの観光客が訪れる場所となっている。その巨大な空間は、韓国に2000年以降無数に増加しているbookカフェの巨大版でもあり、世界中の多様な人々が往来する自由な文化空間となっている。

2020年代半ばの現在の韓国では、100年前の朝鮮近代のオリニ運動——子ども（オリニ）の人権の解放と尊重を訴える民族独立運動——から始まったオリニ文化としての韓国の子どもの本の文化が、童心芸術と民族文学を追求した童話や童謡の創作から始まった従来型の＜韓国児童文学＞から、社会参与・社会変革を志向する＜青少年文学＞の創作へと変化し、さらに、自由な精神の解放と多様性の理解と分かち合いと共感の文学、あるいは大人も心遊ばせるアートとしての＜絵本文化＞へと大きな展開を見せている。

そして、世界と対話する現代韓国オリニ文化が出現し、2020年のベク・ヒナのアストリッド・リンドグリーン記念文学賞受賞、2022年のスージー・リーの国際アンデルセン賞受賞、さらには2024年のハン・ガンによるノーベル文学賞受賞につながったと筆者は解釈している。これらの世界的な賞を受賞した韓国の作家は、いずれも1970年代前半生まれの女性である。

1987年の民主化宣言以降、韓国の新しい絵本文化を開拓し、本稿で整理した盧武鉉政権までの20年間で奔走したのは、1960年代生まれで1980年代に大学に通いながら民主化運動に参加した386（サンパルユッ）世代（この言葉が生まれた90年代において彼らが30歳代だったことから、当時流通していた新世代PCにな

ぞらえて新時代を創出する世代の意味で使われた）の作家や編集者たちだった。

それからさらに15年が経過し、2023年に韓国児童文学100年、韓国現代絵本35年を迎えたのであるが、今や世界から注目される韓国の文学と絵本文化の現住所は、ノーベル文学賞を受賞したハン・ガンに象徴されるように、いずれも1970年代生まれの女性作家によって示されている。このことは、現代韓国の時代相をよく表していると言えるのではないか。いわゆるK文学の『82年生まれ、キム・ジョン』^{xv}が日本でも多くの共感を得られて久しいが、こうしたフェミニズム文学が台頭してきた背景と同じ文脈で、韓国の女性作家の世界的躍進を読み解くことができるだろう。最後に、現代韓国における子どもの本の文化と研究に関する重要事項を以下に年表として整理する。

*本稿は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究（C））、（課題番号：24K03825）「1920年代朝鮮における童話観の形成と外国童話の受容過程研究」による研究成果の一部である。

*本稿は、国立国会図書館国際子ども図書館に委託された韓国語の児童書等に係る調査（2024年6月～2025年2月）に関連して執筆した報告書をもとに大幅に書き直したものである。

「現代韓国における子どもの本の文化・研究」 重要事項年表

*大竹作成、2024年10月改訂版

年	重要事項	解説
1967年	『児童文学概論』（文運堂）刊行	李在徹著。初の体系的韓国児童文学史
1976年	『児童文学評論』（児童文学評論社）創刊	李在徹主幹。児童文学の評論と研究が本格的に始められ、現在も年4回刊行されている。通巻192巻
1977年	児童文学叢書「チャンビ児童文庫」刊行	創作と批評社（1966年創刊の『創作と批評』誌の刊行から始まり、1974年会社設立）による重要な韓国児童文学叢書。회사 소개 - 창비 Changbi Publishers
1978年	『韓国現代児童文学史』（一志社）刊行	李在徹著。韓国児童文学研究の基盤となる
1980年	オリニ図書研究会 設立	読書文化を推奨する市民運動団体。1995年より推薦図書目録作成 https://childbook.org/
1984年	権正生『モンシル姉さん（몽실언니）』創作と批評社（창작과비평사）刊行（日本語版：てらいんく、2000）	韓国児童文学の代表的作家権正生の作品。1990年にTVドラマ（MBC制作）として高い視聴率を得た国民的作品
1988年	韓国児童文学学会 創立	韓国初の児童文学学会
	柳在守『山になった巨人 白頭山ものがたり（백두산이야기）』トンナム（통나무）刊行（日本語版：福音館書店、1990）	韓国初の単行本創作絵本
1990年	子どもの本専門書店「チョバン（초방）」創立	韓国初の子どもの本専門書店。代表は申京淑（KBBY設立者） http://www.chobang.com/
1991年	子どもの本専門出版社「ポリ（보리）」創立	https://www.boribook.com/
1994年	子どもの本専門出版社「ピリョンソ（비룡소）」、「チェミマジュ（재미마주）」創立	ピリョンソ https://bir.co.kr/ チェミマジュ http://www.jemimaju.com/
1995年	KBBY（韓国国際児童青少年図書評議会）創立	IBBYの韓国支部が創立される。初代事務局長は申京淑 KBBY 국제아동청소년도서협의회 - IBBY의 한국 지부, 세계아동청소년도서 교류, 비영리민간단체
	子どもの本専門出版社「キルボッオリニ（길벗어린이）」創立	この年、キルボッオリニより、クォン・ユンドク『マンヒの家』（日本語版：セーラー出版、1998）、イ・オクベ『ソリちゃんのチュソク』（日本語版：セーラー出版、2001）、チョン・ユジョン『おいしいよ！はじめてつくるかんこくりょうり』（日本語版：福音館書店、2013）が刊行され、韓国の単行本創作絵本出版が本格化する。 https://www.gilbutkid.co.kr/renew/

1996年	ベルヌ条約加盟	世界的な著作権条約に批准
2003年	順天奇跡の図書館 開館	最初の「奇跡の図書館」。募金とボランティアで成り立つ民間図書館。2024年現在韓国内に18か所ある。 <u>매일 매일 책 읽어주는 순천기적의도서관</u>
	創作と批評社が社名をくチャンビ (창비) >に変更	<u>창비 Changbi Publishers</u>
	児童文学評論誌『チャンピオリニ (창비어린이)』創刊 (季刊)	2003年夏号～。2024年冬号現在、通巻87号。 <u>창비 어린이 출간목록 - 창비 Changbi Publishers</u>
2006年	国立オリニ青少年図書館 開館	韓国初の国立子ども図書館 <u>국립어린이청소년도서관</u>
2007年	韓国児童青少年文学学会 創立	<u>한국아동청소년문학학회</u>
	チャンビ青少年文学賞 制定	チャンビ (出版社) による青少年文学賞 <u>창비청소년문학상 - 에스24</u> <u>문학상/공모 - 창비 Changbi Publishers</u>
2010年	韓国児童文学研究センター 開設	慶熙大学校中央図書館内
2012年	ソウル図書館 開館	<u>서울도서관</u>
2014年	順天市立絵本図書館 開館	<u>순천그림책도서관</u>
2017年	ピョルマダン図書館 開館	<u>별마당 아트 프로젝트 스타필드 코엑스몰</u>

参考文献

大竹聖美「韓国児童文学研究文献解題―1967～2004―」日本児童文学学会『児童文学研究』第38号、pp.36-54、2006年

——「韓国における児童文学研究・評論の歴史と現況」日本児童文学学会『児童文学研究』第38号、pp.55-67、2006年

——「韓国児童文学研究文献解題―2005年～2007年―」日本児童文学学会『児童文学研究』第41号、pp.12-24、2008年

——「韓国語圏児童文学研究文献解題―2008年～2012年―」日本児童文学学会『児童文学研究』第46号、pp.57-69、2014年

大竹聖美・池好順「現代韓国児童文学の特徴：

韓国初等学校国語教科書掲載作品を通して考える」東京純心大学『東京純心大学紀要．現代文化学部』第25号、pp.25-39、2021年
<https://doi.org/10.57503/0002000122>

——「国語教科書掲載作を通して考える韓国における外国児童文学受容の特徴とその変化―2015年改訂版（第7次教育課程）韓国初等学校国語教科書と1995年改訂版（第6次教育課程）韓国国民学校国語教科書を比較して」東京純心大学『東京純心大学紀要．現代文化学部』第26号、pp.17-27、2022年 <https://doi.org/10.57503/0002000010>

——「韓国初等学校国語教科書

(第7次教育課程・2015年改訂版)と教科書掲載昔話—伝統文化尊重と現代社会対応としての多様性受容・ジェンダーフリーメッセージ」東京純心大学『東京純心大学紀要・現代文化学部』第27号、pp.21-32、2023年 <https://doi.org/10.57503/0002000007>

——「韓国の児童文学賞を起点に振り返る韓国児童文学史の理解—韓国児童文学史における姜小泉・尹石重・馬海松が果たした役割と、小泉児童文学賞・尹石重文学賞・馬海松文学賞受賞作一覧」東京純心大学『東京純心大学紀要・現代文化学部』第28号、pp.1-16、2024年 <https://doi.org/10.57503/0002000067>

——「2015年改訂版・韓国初等学校国語教科書を通して考える現代韓国児童文学」、JSPS 科研費 基盤研究(C)20K00522研究成果報告書『東アジアにおける国語教科書と児童文学—東アジア児童文学史の構築をめざして—』pp.18-26、48-52、2024年 <https://doi.org/10.57503/0002000126>

i 1890～1957年。初の朝鮮皇室留学生として東京に留学。東京府立第一中学校及び早稲田大学で短期間学ぶ。帰国時に印刷機を持ち帰り、初の近代雑誌『少年(ソニョン)』を刊行。その後も複数の雑誌を創刊した。新体詩や唱歌を発表し、新知識の啓蒙に努めるなど、朝鮮における近代文学の先駆けを担った。

ii 1908年11月～1911年5月、通巻23号、崔南善(チェ・ナムソン)主宰、新文館発行

iii 1899～1931年。1919年の3・1独立運動で活動したあと、東洋大学に留学。日本の『赤い鳥』と比較される児童雑誌『オリニ(子ども)』を創刊。その他、5月5日のオリニナル(子どもの日)創設、童話集発行、口演童話会主催など、児童の人権と民族の

ためにつくした。近代児童文化・文学の父として尊敬されている。

iv 1923年3月～34年7月、通巻122号、方定煥(パン・ジョンファン)主宰、開闢社発行

v 『子どもの詩の園』(A Child's Garden of Verses, 1885)収録。

邦訳版は、よしだみどり訳『子どもの詩の園』(白石書店、2000年)、間崎ルリ子訳『ある子どもの詩の庭で』(瑞雲舎、2010年)、ないとうりえこ訳『子どもの詩の園』(メディアファクトリー、2014年)などがある。

vi 大竹聖美「韓国近代児童文学創成期における愛——方定煥の児童文学における愛」東京純心大学キリスト教文化研究センター『カトリック文化 カトリコス』No.10、p.1-43、2017

vii 大竹聖美「方定煥の東京留学——李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む」東京純心大学紀要・現代文化学部、第22号、p.1-20、2018

viii 大竹聖美「方定煥と朝鮮少年運動協会の〈オリニナル〉—1920年代東京の「児童保護宣伝」(1921年4月・11月)、「児童愛護デー」(1922年5月)と比較して—」東京純心大学紀要 現代文化学部(27)、PP.1-20、2023

ix 大竹聖美「近代韓国児童文学の開拓者・方定煥と現代韓国絵本の開拓者・柳在守の共通点—韓国の児童図書出版における個の尊厳とアイデンティティ—」日本口承文藝學會『口承文藝研究』(45)、p.61-71、白帝社、2022

x 原画展：会期・会場：2000年4月28日(金)～5月13日(土)、国際交流基金フォーラム／2000年5月26日(金)～6月25日(日)、宮城県美術館。主催：国際子ども図書館設立推進議員連盟ほか

図録：『オリニの世界から：韓国絵本原画展 国際子ども図書館開館記念』国際交流基

- 金アジアセンター、2000.4
- xi 1987年第5回野間コンクール大賞受賞、1989第20回講談社「出版文化賞」絵本賞受賞（1989年）
- xii 길벗어린이（2025.1.10最終閲覧）
- xiii KBBY 국제아동청소년도서협의회 - IBBY의 한국 지부, 세계아동청소년도서 교류, 비영리민간단체（2025.1.10最終閲覧）
- xiv ChoBang（2025.1.10最終閲覧）
- xv 보리출판사 누리집입니다（2025.1.10最終閲覧）
- xvi 비룡소（2025.1.10最終閲覧）
- xvii Jaimimage（2025.1.10最終閲覧）
- xviii 日本国際児童図書評議会（JBBY）の設立は1974年。歩み | JBBY（2025.1.10最終閲覧）
- xix 2003年設立韓国博物館教育学会初代会長
- xx KBBY 역사 - KBBY 국제아동청소년도서협의회（2025.1.10最終閲覧）
- xxi 어린이도서연구회（2025.1.10最終閲覧）
- xxii 金泳三（キム・ヨンサム／김영삼）大統領。就任期間：1993～1998年
- xxiii 매일 매일 책 읽어주는 순천기적의도서관（2025.1.10最終閲覧）
- xxiv 국립어린이청소년도서관（2025.1.10最終閲覧）
- xxv 国立国会図書館国際子ども図書館（2025.1.10最終閲覧）
- xxvi 회사 소개 - 창비 Changbi Publishers（2025.1.10最終閲覧）
- xxvii 문학상 / 공모 - 창비 Changbi Publishers（2025.1.10最終閲覧）
- xxviii 한국아동청소년문학학회（2025.1.10最終閲覧）
- xxix 大竹聖美「韓国の児童文学賞を起点に振り返る韓国児童文学史の理解―韓国児童文学史における姜小泉・尹石重・馬海松が果たした役割と、小泉児童文学賞・尹石重文学賞・馬海松文学賞受賞作一覧」東京純心大学『東京純心大学紀要・現代文化学部』第28号、pp.1-16、2024年
- xxx 白香夏訳、コリーヌファクトリー、2016年
- xxxi 邦訳版：矢島暁子訳、祥伝社、2019年
- xxxii 邦訳版：小山内園子、イースト・プレス、2021年
- xxxiii 元鍾讚（ウォン・ジョンチャン／원종찬）、1959年～、仁荷大学韓国語文学科教授、韓国児童青少年文学学会初代会長、児童文学評論家。
- xxxiv 블루픽션상 | 비룡소（2025.1.10最終閲覧）
- xxxv 문학동네（2025.1.10最終閲覧）
- xxxvi 盧武鉉（ノ・ムヒョン／노무현）大統領。就任期間：2003～2008年
- xxxvii 白樂晴（ペク・ナクチョン／백낙청）、1935年～、ソウル大学人文学部英語英文学科名誉教授、ハーバード大学英文学博士。『創作と批評』の創刊、創作と批評社の設立を通して70年代、80年代の軍事独裁政権下以降現在に至るまで進歩的民主的改革派として民衆・民族文学、社会参与文学を先導した。
- xxxviii 어린이날 100주년 기념 국제학술대회, 한국아동청소년문학학회 2023년 1월 13・14일, 서울교육대학교
- xxxix 2023 세계방정환학술대회, 사단법인 방정환연구소・숙명여대 세계아동청소년문학연구센터, 2023년 11월 9～12일,淑明女子大学
- xl 서울도서관（2025.1.10最終閲覧）
- xli 순천그림책도서관（2025.1.10最終閲覧）
- xlii 서초구립그림책도서관（2025.1.10最終閲覧）
- xliii 그림책도서관（2025.1.10最終閲覧）
- xliv 별마당 아트 프로젝트 | 스타필드 코엑스몰（2025.1.10最終閲覧）
- xlv チョ・ナムジュ著、斎藤真理子訳、筑摩書房、2019年